

17 藻場造成調査

担当：倉長亮二（増殖推進室）

実施期間：平成26年度 予算措置なし

目的

近年、磯見漁業の重要魚種であるアワビ、サザエの漁獲が減少傾向にあり、その原因の一つとして藻場の衰退が指摘され、本県では平成16年「鳥取県藻場造成アクションプログラム」に基づきアラメの移植事業をH16～20年で実施するなど藻場造成に取り組んできていた。しかし、近年の海水温の上昇等により従来の造成手法では対応できなくなってきた。そのため、新たな藻場造成手法を開発するための基礎資料を収集する。

方法

① クロメスポアバック追跡調査

御来屋漁港西側地区について2013年からスポアバック方式による藻場造成を実施してきた(表1, 図1)が、その効果を確認するため、2013年12月3日に御来屋漁港西側に投入したクロメスポアバックについて追跡調査を2014年5月14日に行った。

② スポアバック試験

御来屋港西側において2014年7月23日にノコギリモク、11月21日にクロメのスポアバック方式の母藻投入を行った(図1, 表1)。また、中山地区において11月22日に御崎港沖でクロメのスポアバック方式の母藻投入を行った。

結果及び考察

① クロメスポアバック追跡調査

潜水調査は、あらかじめ水中ビデオカメラで土嚢が確認できた東西2点について行なった。潜水したところ、土嚢は連続して目視でき、投入した地点にそのまま残っていた。本調査では、土嚢が付着基質となることを期待したが、東西2地点ともに、クロメ、ノコギリモクの幼体が土嚢に付着することはみられなかった。調査点の東側ではクロメ幼体は確認できなかったが、西側では数か所で確認できた。また、土嚢に母藻が固着しているものが見られ、土嚢に固着しておけば母藻をそのまま残しておけることが示唆された。(写真1)

② スポアバック試験

御来屋港西側では図1及び表1に示す3か所でノコギリモク及びクロメのスポアバック方式による造成を行った。このうちクロメについては、昨年度の経験から母藻を土嚢に直接縫込み、母藻自体もそのまま着底することを期待した(写真2)。

御崎港では図2及び表2に示す位置に25個投入し、これについても母藻を土嚢にクロメ母藻を直接縫込む方式で行った。

成果と課題

今年度は御来屋、中山地区でクロメの造成を行ったが、県内の多くの地区の漁業者から藻場の減少が叫ばれており、今後も範囲を広げ継続して行う必要がある。

表1 藻場造成位置

年月日	種類	個数	位置	
			経度	緯度
2013/6/28	ノコギリモク	20	35° 30.7024'	35° 30.6120'
			133° 29.2077'	133° 28.8864'
			8.3m	9.0m
2013/7/8	ノコギリモク	30	35° 30.8099'	35° 30.7652'
			133° 29.2194'	133° 29.1619'
			8.9m	8.4m
2013/12/3	クロメ	50	35° 30.804'	35° 30.745'
			133° 29.307'	133° 29.069'
				9m
2014/7.23	ノコギリモク	30	35° 30.6667'	35° 30.4828'
			133° 29.1487'	133° 29.0290'
2014/11/21	クロメ	20	35° 30.7505'	35° 30.6737'
			133° 29.0497'	133° 28.9994'
			6.6m	6.6m

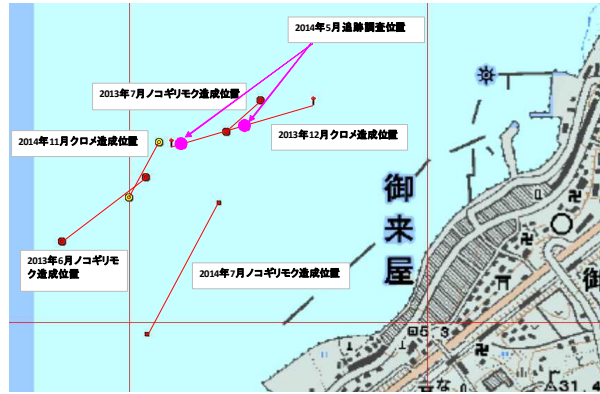


図1 藻場造成位置



写真1



写真 2



図 2 中山クロメ造成位置



写真 3